春よ、来い

愛美

――沈丁花（じんちょうげ）。

人間たちに春の到来を教える木。

芳（かぐわ）しい強い香りを放ち、愛しい人間の娘の記憶を鮮烈なまでに思い起こさせる花。

春の、花。

――りんの、花。

「――りん、それは毒だ」

あれは、私がりんを失いかけた冥界から戻り、まだ間もない頃のこと。

「えっ！　これ、毒なの？！」

私の言葉に、幼いりんは口に運びかけていた赤い木の実を驚いたように見つめた。

「わあ、びっくりしたぁ、りん、知らなかったよー！！」

そう言ってりんはあわてて木の実を捨てると、手に付着していた汁をごしごしと着物で拭った。

「りん、大丈夫か？」

琥珀があわてて布を水で濡らし、りんの指をしっかりと拭いてやる。

「ばかもんが、食い意地をはって道端に生えてるものを何でも食おうとするからじゃ！」

邪見が呆れてそう言い、りんは照れたようにえへへ、と笑った。

「だって、りん、お腹すいてきちゃったんだもん」

「阿呆っ、ならばちゃんとそう言わんか！」
「うん、ごめんね、邪見さま」
りんは屈託なくそう言い、再び私を見上げて、教えてくれてありがとう、殺生丸さま、と言った。
空腹、と聞いて私はいつものように、近くの岩場に腰を下ろす。「……邪見」と呼ぶだけで、小さな従者は飛び上がって平伏した。
「ははっ、心得ております、殺生丸さま。おい琥珀、阿吽をこちらへ回せっ！」
「はい、邪見さま」
琥珀の手を借りて邪見が阿吽へよじ登り、琥珀もその後ろに跨る。
「おい、りんよ、殺生丸さまとここで待っておれ。むこうの谷に木苺が実を付けておるから、取ってきてやる」
「うわあ、本当？　りん、木苺大好き！！」
りんはぴょんぴょんと跳ねて嬉しそうに笑うと、大人しく私のそばにきて、岩場にちょこんと座った。
「ありがとう、琥珀、邪見さまー」
「大人しく待っておれよ、りん」
「うん！」
二人が阿吽に乗って飛び去ると、りんは私を見上げて、いつものように高い声で囀(さえず)り始めた。
「木苺かぁ、甘いといいね！　殺生丸さまも、木苺好き？　りんはねぇ、人里にいるとき、よく食べてたんだよ。いつも、山で実が生る場所が決まっててね、りんはね……」
可愛らしい小鳥のようなりんの声が、途切れることなく続く。その声に耳を傾けながら、目の前に存在している命を確かめるように、私は手を伸ばしてそっとりんの髪に触れた。
りんの命は、もう二度と天生牙では救えない。
天空に浮かぶ母の城から帰ってきて以来、りんが一人で食料を取りに行くことはおろか、私がりんから離れることも格段に少なくなった。今のように、りんが空腹を感じた時は、邪見か琥珀が食料を取りに行く。二人とも、冥界での出来事が引き金となったのだろう。今ではそれが、当たり前になった。……もう二度と失いたくない、愛しい命、それ故に。

「あ、そうだ。ねえ、殺生丸さま、聞いてもいい？」
大きな瞳が、こちらをのぞき込んでいる。
「……何だ」
私がりんの問いに答えてやる回数も、増えた。
「殺生丸さまは、どうしてあの実が毒だって知ってたの？　あれって、花は薬なのに」

りんの問いに、私は眉をひそめた。先ほどの、りんが食べようとしていた実のことか。

「……花が薬？」

「うん、そうだよ。あれ、「じんちょうげ」っていう木でしょ？　昔、おっかぁから教えてもらってことあるの。すごく良い匂いがするお花なんだけど、擦り潰して飲むと、痛いのが直る薬になるんだって。でも、実が毒だなんて、聞いたことなかった。殺生丸さまは、どうして知ってたの？」

大きな瞳でのぞき込まれて、私はりんが食べようとした赤い実を改めて眺め見る。

「……理由はない。お前にとって毒であるものは、私には分かる。それだけのことだ」

事実、その通りだった。

りんが手にして、口に入れようとして、その瞬間にそれはりんにとって毒だと、私には分かった。私は特段、植物の性質に詳しいわけではない。りんを守ろうとする私の意志が、鋭い嗅覚を、りんに関してだけ更に鋭くさせているだけのことだ。

故に、りんの命を害そうとするものは人であれ妖であれ、たとえ植物であろうとも、即座に分かる。ただ、それだけのこと。

「……もう二度と、お前を死なせはせぬ」

本当に、ただ、それだけのことだ。

「……殺生丸さま……」

りんは驚いたように私を見上げていたが、しばらくして、えへへ、と笑うと、座ったまま下を向いてしまった。

「……どうした」

そう問うた私を、りんは上気した桃色の頬でゆっくりと見上げ、「嬉しいの」と言い、ふふふ、と照れたように笑った。

――後にりんは、あの時のことをこう言った。

「殺生丸さまがりんのことを守ろうとしてくれていることは、ずっと分かってたんだよ？　りんはまだ小さかったけど、りんのことを大切にしてくれていることは、ちゃんと分かってたの。でも、あの時ね、殺生丸さまは初めて言葉に出してくれたんだよね。『もう二度と、お前を死なせはしない』って。りん、ほんとに、ほんとに、嬉しかったの」

――その出来事が発端なのだろう、沈丁花は、りんにとって特別な思い入れのある花になったらしい。

成長し、私の妻となったりんは私たちの屋敷の庭にまず、沈丁花の木を植えた。幼いりんが食べようとした、あの毒の実を植えたのではなく、どこからか手に入れてきた挿し木から、りんはその木を育てた。

そんなに庭に沈丁花が欲しいのなら、成木を庭師に植えさせればよい。

泥まみれになったりんの手を見て私がそう言うと、りんは笑いながら、「自分で育てた方が思い出になるから、いいの。ありがとう、殺生丸さま」と言った。

――数年後、りんが植えた沈丁花は、鮮烈な香気を放つ花をつけるようになった。

だが、その沈丁花は、花は咲かせても実を付けることはなく、それ故、やんちゃ盛りだった幼い私たちの子供が、毒の実を誤って口にすることもなかった。

私の血が流れている子供ならば、わざわざそんなものを食べるはずもないのだが、りんは「殺生丸さまに似てるならいいけど、りんに似てたら心配だもん。お腹がすいてたら、間違って食べちゃうかもしれないし……」と、ずいぶん思案して、実をつけぬ雄木をわざわざ探したらしい。

結局のところ、私と半妖の子供たちを悩ませたのは、毒の実などではなく、強烈な花の香気だった。

沈丁花の香りは、人間の嗅覚でも七里先まで届くという。嗅覚の鋭い私や半妖の子供たちには匂いが強すぎて、毎年その時期になると、りん以外は皆、庭の風上に避難することになってしまった。

ある年のこと、私が花の匂いに耐えかねて、屋敷の一室を締め切り書物を紐解いていると、りんがやってきて、

「……殺生丸さま、大丈夫？　やっぱり辛い？」

と、申し訳なさそうに言った。

「どうしても植えたいって、りんが我儘（わがまま）言ったから…」

しゅん、と申し訳なさそうに俯くりんを見ていると、心の中で溜息をつきながらも、こう言わざるを得なかった。

「……別に構わん。耐えられぬほどではない」

「ほんと？」

「……どうしても庭に欲しかったのだろう」

「うん……思い出の木だから」

りんはそう言い、座していた私の横に腰を下ろすと、そっと肩に寄りかかった。まるで子供のように、甘えて私の着物に鼻を擦り寄せる。

花の香りに混じって鼻腔に届くりんの香りは、柔らかで愛しい、大人の女の匂いがした。抱き寄せようと手を伸ばすと、りんがぽつりと言った。

「この花が咲くとね、春がくるでしょう？」

「……春？」

「そう、春。毎年、この匂いで春がくることを知って、殺生丸さまがりんを『もう二度と死なせはしない』って言葉に出してくれた、あの時のことを思い出すの。すごく嬉しかったから忘れることは絶対にないんだけどね、花の香りのおかげで、どうしてだか、あの時のことがすごく鮮明に思い出せるんだ。殺生丸さまと一緒に座っていた岩の感触とか、地面に生えてた草の色や形まで、くっきり思い出せるの。すごく優しかった殺生丸さまの声も、あの日、邪見さまや琥珀と一緒に食べた木苺の味も。……不思議でしょう？」

私は、寄りかかったりんの頭を、そっと撫でた。幼かったあの頃と同じように、指で髪を梳いてみる。

「……匂いと記憶は、結びつきが強い。ほかの五感よりも、ずっとだ」

「そうなんだ……じゃあ、殺生丸さまは鼻がいいから、りんよりずっと色んなことを詳しく覚えてるんだね」

そもそも、人間と違い、私には忘却の力がないのだが、それは黙っておく。

「ごめんね、殺生丸さま」

「……？」

突然の謝罪を疑問に思い、りんの顔をのぞき込むと、りんはいたずらっ子のような表情で、えへへ、と笑った。こんな笑い方をすると、子供を産んだようには見えぬほどに、りんは幼くみえる。

「木はどんどん大きくなるから、匂いも、もっともっとすごくなっちゃうと思うけど……沈丁花の香りだけは、毎年我慢してね？」

「……」

私はきっと苦虫を噛み潰したような表情をしていたに違いないが、そんな私を見ても、りんの口元はくすくすと笑っている。りんは、私がりんに甘いことなどすっかり分かっている。それを分かった上で、さらに甘えて我儘（わがまま）を言うりんに、また愛おしさが込み上げてきてしまう。

（……困ったものだ）

そう思いながら、私は苦笑した。こんなに愛おしいのだ。この程度の我儘（わがまま）が、許せぬはずがない。

私はりんの首もとに唇を押し当てると、ゆっくりとそのまま畳の上に押し倒した。

「……その分、代償はしっかり払ってもらう」
「わあ、どうしよう」
そう言いながらも、りんは私の下で、まだくすくす笑っている。帯を解きながら、頬に、耳元に、唇に、何度も口づけを落とす。りんのくすくす笑いが、甘い吐息に変わるのに、さほど時はかからないだろう。

花の匂いが気にならなくなる方法など、簡単だ。
りんの匂いで己を満たしてしまえばいい。

部屋の外には、花の香りを和らげるように細い雨糸が落ちてきていた。
淡い光が立ちのぼり、沈丁花の香りが大地の匂いに溶けていく。

――沈丁花の香りは、ただただ幸福で甘い、りんの記憶。

――りんを失ってのち、沈丁花の香りの漂う季節は、私にとって狂おしいほどに甘く、苦しい季節となった。

――沈丁花。
人間たちに春の到来を教える木。
芳(かぐわ)しい強い香りを放ち、愛しい人間の娘の記憶を鮮烈なまでに思い起こさせる花。

春の、花。　……りんの、花。

めぐる季節の中、まだ冷たい空気の中で花が弾け、沈丁花の香りは風に乗り、浅き春を呼ぶ。花の香りを含んだその風は、私に狂おしいほどに鮮明に、甘い記憶を蘇らせる。香りの中で瞼を閉じれば、そこに、りんが蘇って現れてしまう。
私に「愛しい」という感情を教えたお前の、懐かしい声までもが、鮮明に。

「……また、会いに行くから」

最後の日、そう言って、りんは微笑んだ。

「……だから、お願い。待ってて……未来で、待ってて」

りんは、少女のように微笑んで、最後の我儘を言った。
私が、りんに甘いことを熟知しているゆえの我儘。私がりんの願いを必ず叶えることも、りんの我儘に、いつも私が頷くことしかできぬことも、分かった上での最後の我儘だった。

生まれ変わってまた巡り会う、と。
りんは私にそう誓ってこの世を去った。

……りんは、案じていたのだろう。
私がりんを失ったのち、どうなってしまうかを。

あの約束がなければ、私は、どんな手を使ってでもりんを手離しはしなかっただろう。死者を甦らせ、骨と土の紛い物にしてでも、私はりんを失うまいとしたはずだ。……己の誇りも矜持も、すべてを失ったとしても。
私の、この狂おしいほどの愛情を、最も理解していたりんだからこその、最後の……我儘だったに違いない。

故に、最後にあれは微笑んだのだろう。
まるで、いつもの我儘を言うように。
りんは、誰よりも理解していた。りんの我儘なら必ず聞きとげてしまう私の矜持を。…私の誇りを。

――りんがいなくなっても、殺生丸さまのままでいて
――また逢える日まで…どうか、あなたのままで

りんの最後の願いは言葉ではなく微笑みとなって、私はただいつものように、頷くことしかできなかった。

りんの、最後の我儘を…私が許せぬはずがない。

りんに預けし我が心は、今も変わらずりんを想い、ただただ、永い時の流れの中で、その誓いが果たされるのを待っている。どれほど月日が流れようとも、私には、ただ、待つことしかできない。

……そればあまりに残酷で、永い年月。

――…春よ。

沈丁花の香り漂う、りんの季節よ。
まだ見ぬ、生まれ変わった愛しいりんよ。

もしも、私が迷い立ち止まる時があろうなら、ふたたび道を指し示すがいい。その馥郁(ふくいく)たる沈丁花の花の香で、夢のように幸福だったあの時間を、思い起こさせよ。

待って、待って、どれほど待ってもまたお前に逢えるのならば、私はいつまでも待つだろう。明日を超え、この先の未来を越えて、いつか、私のこの想いが再びりんに届くことを信じながら。

りんよ……愛しい我が妻よ。
私は、ここにいる。
たった独りで、ここにいる。

お前がもう一度、この世で生を受けるまで、私は一人、歩き続けるだろう。

流るる雨のごとく、流るる花のごとく、ただただ、歩き続けることを、私はお前に誓う。

瞼を閉じれば、そこにお前の姿がある。
愛らしく可憐で、愛おしい、お前の姿が見える。

沈丁花の香りと共に、私は待とう。

この世へお前が再び生を受けるのを。
未来でまた、お前と生きよう。
たった一つの、愛しい命のお前と。

沈丁花の香りと共に、私は、まだ見ぬ春をただひたすらに、待ち続けるだろう。

――― 目を閉じれば、そこに

――――― 甘く愛しい、りんの面影が揺れている。

※ この作品は、松任谷由実さんの『春よ、来い』へのオマージュです。